



建築家隈研吾さんデザインによる、梶原町総合庁舎

(右) 庁舎外観。「越知面区」「四万川区」「東区」「西区」「初瀬区」「松原区」6地区が支え合う梶原町のセンター機能を持つ。建築家隈研吾さんの設計で、建材には梶原町産のスキの集成材が使われている。屋根には80kWの太陽光発電パネルが、地下には地中熱利用のクール・チューブが設けられている。エアコンはなく、クール・チューブの空調で庁舎内は快適なもの。
(左) 庁舎内観。庁舎内に銀行、農協、商工会などの施設も併設。時折開け放たれる半屋外の広場には神楽などが演じられる移動型のステージがあり、アートディレクター森本千絵さんのオブジェ「受話樹」が「ゆすはらびと」の絆を象徴するかのよう展示されている。



龍馬脱藩の道

1862年、坂本龍馬は土佐藩を脱藩し、梶原で一泊し、この地の勤王の志士とともに下関に向かった。梶原町は、新しいまちづくりをめざす思いを龍馬の高い志と重ね、歩いた道を『龍馬脱藩の道』として残している。



電柱をなくした、美しいまちなみ

無電柱化事業によって張りめぐらされた電線類がなくなり、美しいまちなみが生まれた。



梶原町長 矢野富夫

高知市立商業高等学校卒業後、梶原町役場入庁。産業建設課長、総務課長を経て、副町長を2期務める。2009年12月に梶原町長に就任（現在2期目）。人と自然が共生するまちづくりに取り組む。



茅葺きの小さな情報交換拠点、茶堂

梶原町には、旅人が湯を呼ぶという客人（まろうど）信仰がある。人々はここで旅人をもてなし情報交換をした。今もまちの中に13ヶ所残り、交流の場になっている。



絆が、雲の上のまちを
選ばれるまちにした。

YUSUHARA TOWN

四万十川源流の梶原川沿いに56の集落が点在する、高知県梶原町。奈良時代から交通の要所であり、「脱藩者」龍馬をもてなした自立の土地。進取の気性に富む「ゆすはらびと」たちは、歴史の継続を目指して、再生可能エネルギーでひとつになる。



梶原町のシンボル『ゆすはら座』

1948年に梶原町の町組によって町産材で北町に建てられ、『梶原公民館』として町民と共に歩んできた。1995年に東町の梶原総合庁舎近くに移転復元。内部には花道や棧敷がしつらえてあり、伝統芸能の津野山神楽などが催される。玄関に、環境モデル都市推進室長の中越健三さんに座っていただいた。

雲の上のまち。高知県梶原町のキャッチコピーだ。四国山地に抱かれ、標高1,455mの雄大な四国カルストを擁する山あいのまちは、お世辞にも利便性が高いとはいえない。ところが今、この地に移り住む子育て世代が増えている。全人口は2016年現在3,600人あまりだが、直近の2年で80人も増え、近い将来は4,000人を目標にしている。

その陰には、もちろん積極的な移住促進策がある。教育の無償化。小中一貫校。空き家を住みやすくりフォームし月15,000円の家賃で貸し出す。これらの施策が功を奏し、大阪、東京で開かれる移住定住フェアも人気だ。

しかし、もっと大きな理由は若い世代の変化だと、矢野富夫 梶原町長は考えている。「東日本大震災以降、子育てをされるお母さんが、利便さや発展性よりも安心できる環境で育てたい、という意識に変わってきました」。こうした意識に選ばれるビジョンを、梶原町は早くから掲げてきた。

「風、光、森、土、水、を、まちづくりに生かしています」と矢野町

長が言うように、再生可能エネルギーによる電力自給にいち早く注目し、1999年には四国カルストに600kWの風車2基による『梶原風力発電所』を建設。木質バイオマス、小水力発電、太陽光発電と、地産地消エネルギーの活用で低炭素化と地域経済循環をはかり、持続可能なまちづくりを積極的に進めてきている。

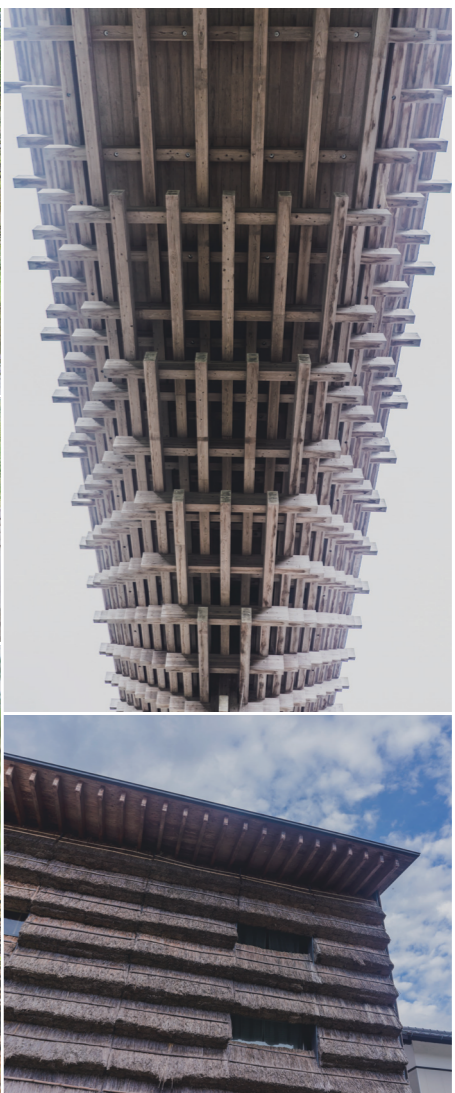
「まちづくりとは、それぞれの地域が生きる仕組みづくり。それぞれのまちは、それぞれの個性があります。梶原の場合は、地域資源を生かすことです」。その地域資源のひとつが、土地面積の91%にあたる森林の約7割を占めるスギヤヒノキなど人工林だ。

車の売電収入の一部を森づくりに投資し、間伐をすることで保水能力の高い森にする。間伐材は建材に、端材はペレットに替えて町内のストーブで燃やし、その灰で堆肥を作ります」。こうして地域経済循環を作り出し、2050年には再生可能エネルギー自給率100%を目指している。

「それには、住む人と心をひとつにしていく必要があります」と、矢野町長は強調する。「梶原町は明治期に気候も環境も違う6つの村が合併したまち。それぞれの地区に『集落活動センター』を立ち上げ、地域ごとに自立できるまちを目指しています」。たとえば『集落活動センター四万川』有志は、閉鎖を前にした地域唯一のガソリンスタンドの経営を住民出資の株式会社で引き継ぎ、地域産品販売の『しまがわ市場』を併設。客足を伸ばしている。次世代の産業を担う『ゆすはら産業担い手育成塾』も動き出し、一期生の1ターナー者が活躍をはじめた。また隈研吾さん設計の「森の図書館」が2018年にオープンし、『地方で生きる仕組みづくり』の拠点施設になる。

土佐には「おきやく」という宴の習慣がある。見ず知らずの人とも酒を酌み交わし親しくなる。外に開かれ、内でひとつになる。「梶原のみんで支えあって生きていく。この絆の強さがゆすはらびとの精神なんです」。梶原の人々は、この土地がこの土地として未来に続いていくために、ひとつになる。

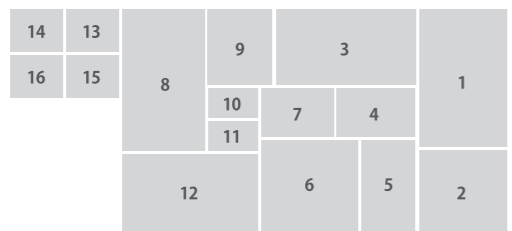
森を生かすことは、
森を残すことだと思ふ。



FSC 認証の森と生きる

梶原町の総面積の91%を占める21,500haの森林は1960年代に積極的に植栽されたスギ・ヒノキなど人工林。間伐等の森林整備のために林道、作業道等の整備や間伐を行ってきた。こうしたことから環境に配慮し適切な森林管理を行うための森林認証制度、FSC認証（Forest Stewardship Council / ドイツ）を、梶原町森林組合が2000年10月に団体としては国内で初めて取得。森を生かす人の営みが続く。

1.雲の上ギャラリーを支える木の伝統工法「勿橋構造」。隈研吾さん設計。2.まちの駅「ゆすはら」の茅葺ファサード。隈研吾さん設計。3.三峰神社へ渡る神幸橋。4.神幸橋の渡り廊下。5.龍馬脱藩の道近くの古杉。6.雲の上ギャラリーの木の渡り廊下。7.梶原町森林組合の製材工場。8.梶原町森林組合 代表理事組合長 森山真二さん。9.見学会パンフレット。梶原町と都市部の施主がつながる。10.FSC認証の壁紙。11.森林組合の壁に貼られた「伐採祈願祭」写真。12.ゆすはらベレット株式会社 工場長 中越信也さん。13.ベレット製造施設。14.倉庫で出荷を待つ木質ベレット。15.未利用材を砕きベレットの材料に。16.木屑(右)を固めてベレット(左)に成形。



“もったいない”は、
このまちの流儀なんだ。

いとろに町産のスギやヒノキが使われ、人々が森の木とともに生きている。梶原町の第一印象だ。森を知るものさしのひとつに、FSC認証がある。日本の団体として梶原町森林組合が初めて取得し、今ではまちの森全体の61%がFSC認証の森になった。

この梶原のFSC材で建てる家が、静かな人気を集めている。まゝ1棟分の建材を梶原町森林組合で受注生産。代表理事組合長の森山真二さんは「顔の見える家づくり」と呼ぶ。

家づくりは工務店の産地見学ツアーからはじまる。施主に梶原町の取組みを知ってもらおう大切なプログラムだ。隈研吾さんの4つの木造建築や風力発電の風車が建つカルスト台地、龍馬脱藩の道など、家族でまちを観てもらったあとに認証森林に入り、自宅になる木に直面してもらおう。建てることで決まっている家族は、自分たちで伐採祈願祭の斧を入れる。

夜は、農家民宿で梶原流のもてなし。おきやくの座だ。梶原で採れた山菜料理など地元味が出る。農家民宿にとっても、この見

学ツアーはありがたい機会だ。大きく宣伝はしない。「梶原のFSC理念を感じてもらい、理念を応援する意思表示をしてくれる施主との、顔の見える関係こそが大事」と、語る。工務店の勉強会などのつながりを通して、関西方面からも森を見に来る人が増えてきたという。

2015年までに県内外あわせて1,429名が見学。153棟の伐採祈願祭を行い、「FSC認証材を使った家」が生まれた。今後は、年間50棟が目標。「梶原の森は植林して50年。山が成熟してきました。これからは利用に進む時期ですが、木は100%使える資源。循環させることが大事です」。梶原町の理念と工務店の家づくりが一致したところをなによりも大事にしたいと語る。

住まいを真ん中にして、人と森人と人が関係を結んでいく。画一的な「商品」ではない、これからの家のカタチが梶原町から生まれている。



梶

原町森林組合の製材工場から少し離れたところに、ゆすはらベレット(株)の工場はある。第3セクターのゆすはらベレットは、木質バイオマスの地域循環利用を目的に、2008年に稼働を開始。ベレット工場を運営管理することを目的に、梶原町と梶原町森林組合、ベレットやベレットポイラー販売の矢崎総業(株)の3者に、町内外の出資者を加えた共同出資で誕生した。間伐時に生じる未利用材や根元材、木材の加工時に生じる端材などを原料に木質ベレットを製造する。「山林所有者から林地残材を1tあたり4,000円で買い上げています」と、工場長の中越信也さん。間伐材など、これまで捨てられていたものに、エネルギー源という新しい価値が生まれた。

当初、製造上難しかったのは、ベレットの水分管理。「伐採した後、木の半分は水分です。木質ベレットは水分10%以下という基準があり、その調整が難しかった」。試行錯誤はあったが、当初の目標だった年間1,800tを安定生産できる体制が整った。地域循環利用を

重視するために、供給先はおもに梶原町内だ。町立梶原学園の冷暖房用ポイラー、「雲の上の温泉」の給湯、JAのビニールハウスのポイラーなど、ベレット・ポイラー用の燃料が中心。燃焼後の灰は回収し、農作物の肥料にしている。

「最近では安定供給先として燃料以外の方法はないか模索しています。たとえば猫砂はどうか。木質ベレットのPRや販路拡大に有効ではないかと注目しています。スギやヒノキのベレットを使った猫砂は、優れた抗菌・消臭効果から人気も高いが「回収まで考えています」と、こだわりをみせる。「もともと、もったいない」という考えからはじまったプロジェクト。そこまですないと循環ではないですから」と、梶原イズムを強調する。

「この事業ができたおかげで、若い人を雇用することができ、現在地元若者2人が働いています。事業の持続可能性を高める意味でも、今後は販路拡大が課題です」と、語る。

地産地消から、さらに次の目標へ。豊富な森林資源を生かした木質ベレットの新たな可能性を、梶原町は模索している。



小中一貫教育校として、さまざまな試みを続ける

2011年に開校した梶原学園は、1年生（小1）から9年生（中3）までが一つの施設で学ぶ小中一貫教育校。異学年交流を積極的に実施する。



リサイクルに子どもたちも協力

家から持ってきて、ここで回収するのだから。ペットボトル回収箱が置いてあった。

町産材をふんだんに使い、木の香りがこちよ校舎

2011年に建設。日がさんさんと降り注ぎ、町産のスギ、ヒノキがいたるところに使われた校舎。フィトンチッドが心に優しい。



梶原町立梶原小・中学校（梶原学園）校長 堅田謙洋さん

須崎市出身。社会科教師として環境教育に熱心に取り組む。子どもの頃は、山や川が遊び場だった。

中学生たちが手作りした、外灯用太陽光パネル

現在校内敷地に3ヶ所。梶原町内に1ヶ所。パネル制作から自然エネルギーの有用性と目的達成の大切さを学んでいく。



梶原町 環境モデル都市推進室長 中越健三さん

梶原町にある自然エネルギー施設のすべてを担当。ときにはメンテナンスにも奮闘（右）。小水力発電の取水口に溜まる落ち葉は、毎朝掃除をしなければならない。秋から冬の落ち葉の多いときは、水を含んだ葉が重く、作業は重労働になる。



四国カルストに建つ「梶原風力発電所」

自然エネルギーのまち梶原のきっかけとなった施設。現在、稼働中の風車2基から2,000kW1基への建て替えを検討中。



中学校の電力と街灯を賄う「梶原小水力発電所」

梶原川にあるわずか6mの落差を利用。発電出力53kw。2009年より運転を開始した。梶原町のメインストリートに灯す街灯（右）。

用水路での小水力発電も実験中

小さな用水路でも発電可能な装置で、小水力発電の実験も進む。



地中熱利用の温水プール「雲の上のプール」

「雲の上のプール」は、ヒートポンプシステムで取り出した地中熱で温水を作る。



このまちの子どもたちは、行動しながら考える。

先進的な自然エネルギーは、このまちの、ふつう。

子育て世代の1ターンUターンの人口が微増傾向にある梶原町。2016年現在、学園は全校生徒209名。数年後の生徒増加に加えて中学の寮に町外の子どもたちも呼び込みたい。「友達と共同生活

「趣 味の釣りを通して気がつくことがあります。30年前には釣れなかった熱帯の魚が高知県の海に増えたことです」。梶原学園校長の堅田謙洋さんは自らの体験を伝えることで、温室効果ガスの問題を子どもたちが考えるきっかけ作りを続ける。

梶原学園の生徒は、自然エネルギーに囲まれて学んでいる。中学校の電力の90%は小水力発電で、隣接する寮の電源はペレットによるバイオマス発電だ。小学3年生は風力発電を見学し、4～5年生で森林や自然エネルギーを学ぶ。中学にあがると、より実践的。「みんなんで太陽光パネルを手作りして校内3ヶ所と町内1ヶ所に外灯を設置しました。自分たちで登下校の安全を守る明かりを作った自信や達成感で子どもたちも成長しました」と、その意義は環境教育だけに留まらない。



自然がまるごと教育フィールド。このまちで育つ彼らは、ごく自然に環境意識を身につけた大人に育つはずだ。

「小学1～2年生の教室で中学生が絵本の読み聞かせをする授業も、自分自身が必要な存在だと実感する機会です。自然の中の気づきや人との関係づくりのために、もっと山遊び川遊びをして欲しい」と、願う。

本三大カルストのひとつ、標高1,330mの四国カルスト高原に、2基の風車が建っている。1999年に梶原町が、平均風速7.2m/sという恵まれた風況を活かして建設した「梶原風力発電所」だ。「この発電所が今の梶原町の基礎を作ったんです」と、梶原町環境モデル都市推進室長の中越健三さん。風車が発電した電気は全量売電し、固定価格買取制度（FIT）認定後は約6,000万円/年の収入になった年もある。これをまちの環境基金に積み立て、さまざまな環境施策の原資にしてきた。「人工林の間伐、太陽光発電、小水力発電、風力発電など、地域資源を使ったエネルギー施策に積極的に取り組んでいます。とくに間伐対象森林の70%は間伐が完了しています」と、成果を語る。

梶原町は2050年には温室効果ガス排出量70%削減、エネルギー自給率100%を目指している。現在電力自給率は約29%。公共施設の屋根を利用した太陽光発電、梶原川の落差を利用した小水力発電などによって、公共施設の電力自給は、ほぼ達成したといえる。



「小水力発電」自給による地域経済循環や低炭素社会の必要性への、町民の理解が不可欠だという。自然エネルギーのまちとして、梶原町のチャレンジは、現在進行形だ。

とくに小水力発電の電力は、昼間は梶原学園に供給し、夜間はメインストリートの街灯に使われる。水量に恵まれた梶原川の小水力発電所は、四国カルストの風車と並んで梶原町のエネルギー自給のシンボルといってもいいだろう。

一般家庭の再生可能エネルギーの普及が課題。梶原町は、環境基金を元手に、太陽光パネルの設置に20万円/kWを助成することをはじめ、小水力発電、小型風力発電、エコキュート、ペレットストーブ、ペアガラスなど、一般家庭の創エネ省エネに手厚い助成を行っている。